

連載　（供覧）いはひまつりのみち

宗教は人を殺し、祭祀は人を生かす
世界平和のための祭祀を復興させる

第二十回　縦構造の祭祀と横構造の宗教

南出喜久治（令和7年6月15日記す）

ちちははと　とほつおやから　すみめおや　やほよろづへの　くにからのみち
(父母と遠つ祖先から皇御祖八百万神への国幹の道)

祭祀は、人類の始原的、根源的、そして永遠の信仰です。ところが後発的に創造された宗教といふ合理主義、個人主義の思想は、我々の祖先や自然や英靈との関係を否定し、絶対的な帰依の対象としての God を生み出しました。

そして、これまでの祭祀や民族信仰を原始宗教などと蔑み、父母、祖父母、曾祖父母へと代々に渡つて紡がれてきた命を絆を断ち切つて、自分も親兄弟も子孫も God との関係ではすべて平面的に平等の地位になりました。縦に繋がつてきた祖先との絆が否定され、生きてゐる者すべてが横並びの平面的な関係になつて、はるか遠くにある天上の God を崇めたさせたのです。

つまり、血の繋がつた遠い祖先とを結びつける地表から天上へと繋がる階段が取り壊され、地表と天上との間には何もなく、その遙か上空に God が居るといふ状況になつたのです。

垂直と水平。この相違は決定的です。命の序列では、子から親は絶対に生まれません。序列が変はることはあり得ず、祖先は永劫に変はりません。

しかし、宗教では、死亡した祖先の存在を無視し、生きてゐる親と子、兄弟姉妹、配偶者、他人のすべてを God の前では平等とします。信心によって救済が決定する完全な個人主義です。予定論（予定説）といふのがあつて、これでは、信心が強いか弱いか、善行を積んだか否かとは無関係に救済されるか否かが決まります。すべて God のみが知るといふことです。

祭祀では、天に続く祖先が上り詰めた命の長い階段があり、それが地上に降ろされたところに自分が居て、これから家族と一緒に上るといふ垂直のイメージですが、宗教では、さうではありません。天上の God と地上に居る人々との間には、階段のやうなものも、蜘蛛の糸のやうなものも、天に通じるもののは一切ありません。親子、兄弟、他人の区別がな

く、地上には祖先の姿も見当たりません。生きてゐる者しか居ません。生きてゐる者しか相手にされないので。ただただ地上の水平の平面上に犇めき合つて天の指示を待つてゐるだけです。そして、救はれるときは、突然に個人個人が天に舞ひ上ることになります。

自分は地獄に落ちてもよいので、親だけは、子だけは救つてほしいなどいふ厚かましい願望は一切通用しないのが宗教の世界です。自分だけが救はれるか否かがすべてであり、家族と雖も他人ですから、God に他人のことをとやかく言ふことはできないのです。それは宗教が徹底した個人主義だからです。